

Title	他者の語り：構築と応答のあいだで
Sub Title	
Author	鈴木, 智之(Suzuki, Tomoyuki)
Publisher	三田社会学会
Publication year	2008
Jtitle	三田社会学 (Mita journal of sociology). No.13 (2008. ) ,p.3- 16
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	特集: 構築主義批判・以後
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20080000-0003">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20080000-0003</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## 他者の語り

— 構築と応答のあいだで —

鈴木 智之

### 1. はじめに

語りという行為とそれによって生みだされていく表象に関心を向けてきた者にとって、構築主義と呼ばれる方法論上の考え方はもちろん容易に遠ざけることのできないものとしてある。むしろ、ことばの意味作用を多少なりとも自律的なものと見なすのであれば——それを外在的現実の忠実な写像と位置づけたり、ある実体的本質の表出としてとらえたりするのでなければ——、言説の働きが「構築的」であるということは自明の事柄に属する、と言うべきかもしれない。したがって語りの分析は、どのようなことばが発せられ、配列され、その効果としていかなる意味世界が組織されたのかを明らかにすることを課題とせざるをえない。外部的要素に「還元」することのできない言語・記号媒介的な意味の編成過程をそう呼ぶのだとすれば、私が行っている研究もまた、その大半において「構築」の解明であることは間違いない。

しかし、その上であらためて、系統的な方法論上の立場として「構築主義」なるものを選択するのかと問われれば、これに対する答えも私にとっては非常に明確で、自分は構築主義者ではないと言う以外にはない。だから、構築主義の可能性をめぐって——例えば、実在に関する前提を持ち込まずに一貫した相対主義的態度を維持することは可能であるか否かをめぐって——白熱した論争がなされた時にも、それは私には関わりようのない議論であると感じていた。近いところにありながら、明らかに自分自身のそれとは異なる認識論上の選択肢。構築主義は常にそうしたものとしてある。

ではどうしてそれほど明確な距離感を感じるのだろうか。これをあらためてふりかえってみると、私の場合にはまず二つの理由が浮かんでくる。

ひとつは、言説の構成がどれほど自律的であろうとも、その意味作用の外部にこれを制約する現実の条件が働いているという感覚があること、そして、その規定要因を明らかにすることにこそ社会学的研究の目的があるという（古い意味での）知識社会学的な関心を手放せないことである。構築主義の立場から見れば、それはひと昔前のパラダイムに属するということになるかもしれない。しかし、その目的を放棄してしまうと、私にとっては（社会学的な）言説分析の面白みはかなり削がれてしまう。

もうひとつは、「語り」というふるまいの中に、「構築」ということばでは言い尽くせない現実を感じていること、そして、その余剰の部分にこそ拘るべきポイントがあるのだと思っていること。そもそも語りとはどのような出来事なのか。人はなぜ語るのか。語りという行為の場

に起こっていることは何であり、そのふるまいにおいて賭けられていることは何であるのか。これを問い直してみる時、「語り」を「構築」という側面においてのみとらえるのは、あまりにも一面的であるように私には思える。「構築」ということばに回収してしまうと、平板に白く塗りつぶされてしまう凹凸のようなものが、そこにあるように感じられるのである。

本稿では、この二つ目の論点に絞って考察を進めていこうと思う。

これまで、構築主義をめぐる議論がなされる時には、しばしば、「語り」と「構築」が等価なものとして置かれてきたように見える。この立場を批判する人々もまた往々にして、「構築の外部」に「語りえぬもの」を想定し、その現実性を根拠に構築主義的アプローチの限界を主張してきた。単純化すれば、次のような二項対立図式を前提として、論争が進められてきたのである。

$$\begin{array}{ccc} \text{語り} & = & \text{構築} \\ & \downarrow \uparrow & \\ \text{語りえぬもの} & = & \text{構築の外部} \end{array}$$

しかし、もとより「語り」とは「構築」に尽きる出来事なのだろうか。二つの項を等号で結ぶことがすでに、語りというふるまいにおいて起こっていることを一面化（矮小化）しているのではないか。そこに生じている事態を別様にとらえることをうながすような経験が、日常的な場面の中にも数多くあるように私には思える。

例えば、人は（少なくとも私は）鮮明に意味を結ばない、つぶやきのようなうめきのような声を発し続けていることがある。その声に応えて、誰かが黙ってそばに寄り添ってくれることを、この上なくありがたく感じることもある。この時、その「声」はいったい何をしているのだろうか。

逆に、相手が言おうとしていることはどうもよく分からないけれど、それでも相槌を打ちながら、それを聴き続けていることが大事だと思うことがある。この時、「私」はその相手に対して何をしようとしているのだろうか。

もっと単純に、私の発したことばが、他者に届いた、分かってもらえたと素直に信じられる時がある。反対に、どれほどことばを費やしてみても、何か大切なことを語り損ねていると思える時もある。表面的には滑らかな会話が続きながらも、まったくことばが届いていないと感じることもある。他者の発したことばの意味を表面的には理解したつもりになっても、どうにも了解しきれない、違和感のようなものが残ってしまう場合もあるだろう。

それぞれの場合に、ことばが伝わったり伝わらなかったりしながら、それでもそこには何らかの関わりが生じている。こうした日常的な経験は、いったい何を物語っているのだろうか。

もちろん、こうした現実に対しても、「構築主義的な態度」で分析することは可能である。

「何か分かった」、「何かを言いあてた」という現実の「構築」。

「自分には分からない」という現実の「構築」。

「意味不明のつぶやき」という事態の「構築」。

しかし、感覚の様々な落差（ex 伝わっている／伝わっていない）を経験する者にとって、それもまたひとつの「構築」であると語ることはさほど面白くない。というより、そうすることによって、やはり平板に塗りつぶされ、覆い隠されてしまうものがあるように思える。それは果たして何だろうか。

おそらく、ひとつのポイントは、その関わりの中で私が他の誰かに出会っている、あるいは出会い損なっていると感じていることにあるだろう。そうであるとすれば、問題を解く手がかりは、語りという場における他者の現れ、語りを介した他者との遭遇の形にある。

## 2. <他者>を「存在させる」ためには・・・

その手がかりを引き寄せるために、ここから、ひとりの哲学者のことばをたどっていくことにする。

<他者>を「存在させる」ためには、語りの関係が必要とされる。（上 128）

これは、エマニュエル・レヴィナスが『全体性と無限』の中に記した一文である。しかし、ここで彼は何を言わんとしているのだろうか。私なりの生半可な知識を呼び起せば、レヴィナスの言う<他者>とは、かの「顔」として現れる他者、すなわち、「私」の理解の限界を超えて、なおそこに現前するような「絶対的他性」をもった他者ではなかっただろうか。「語り」（言説）による包摂の範囲を超え、「語りえぬもの」の領域に立つ何者か。その<他者>の「存在」のために語りが必要であるとは果たしてどういうことなのだろう。

そう思ってレヴィナスのテキストを読み直してみる。すると、一面においてはやはり、<他者>は「外部性」において定義され、本来「私の思考が包み込むことのできないもの」、「無限なもの」として位置づけられている。ことばを語ることによって、人は世界を対象化し、主題化し、これによって理解可能なものとして「所有」しようとするのであるが、<他者>は、この意識的な包摂（主題化、客体化）の働きには、決して従属させることのできないものである、と。

私のうちにある<他者>の観念を踏み越えて<他者>が現前する様式は、じっさい顔と呼ばれている。顔というその現前のしかたは、主題として私の視線のもとにすがたをあらわし、ひとつのイメージをむすぶさまざまな性質の総体として繰りひろげられるものではない。<他者>の顔は、顔が私に残す、手がかたどることのできるイメージを不断に破壊し、それをあふれ出す。私に釣り合い、観念されたもの（*ideatum*）に釣り合った観念を、つまり適合的な観念を破壊して、あふれ出すのである。（上 80）

しかし、他方においてレヴィナスは、まさにそのような「外部のもの」との関係こそが、語りであり、ことばの始原であることを強調している。世界が私の「認識」の中に包含されてしまうものであるならば、人はことさらに「ことばを發し」、その世界を他者に指示しなくてもよい。人が、ことばを語るということがすでに、〈他者〉に直面する行為、〈他者〉に向かうふるまいとしてあるのだ。そこに私の思考に包摂されえない何者かが現れていればこそ、人は語らねばならない。

語りによってはじめて「〈他者〉の表出を迎え入れる」(上 81)ことができる。その意味において、「ことばの本質とは〈他者〉との関係である」(下 60)。

ここでの彼の主張はまず、語りというものが常に「宛て先としての他者」を想定してなされているということにある。確かに、私たちがことばによって何事かを主題化するということは、他者に向けて世界を指し示すこと、世界の〈同一性〉の共有を求めて、〈他者〉に何ごとかを提供することである。「主題化するとは、ことばを語ることで〈他者〉に世界を呈示することである」(下 66)。

とすれば、「私」がことばを介して世界を主題化し、これを理解しようとすることもまた、「私」一人の内部で自発的になされていく作業ではなく、〈他者〉が「私」に、そして「私」が〈他者〉に語りかけ、その世界を指し示すという関係の上に成り立っているはずである。「世界は他者のことばのなかで提供され、命題が世界をもたらす。〈他者〉が現象の始原なのである」(上 175)。さらに単純化して、私たちがことばを發する時には、すでに「コミュニケーション」を前提にしており、そこには、対話の相手としての〈他者〉が出現しているのだと言ってもいい。

ただし、レヴィナスに即して考える上で重要なことは、このことばのコミュニケーションは、〈他者〉の外部性、その〈他性〉を決して回収し、消去してしまうことがない、という点にある。

語りは、〈私〉と〈他者〉とのあいだの隔たりを維持する。その隔たりは、全体性を再構成することをさまたげる根底的な分離であり、分離は超越によって要請されるものなのである。(上 54)

だから、ことばによって「主題化」がなされても、それによって「外部性との関係が有する意味が汲みつくされることはない」(下 260)。ことばは〈他者〉に向けて語られるのであるが、それが〈他者〉を包摂してしまうわけではないのである。

私たちはここで、語りとの関係において、〈他者〉を二つの位相に分けて考えなければならぬことに気づく。それは、レヴィナスの用語を借りれば、「主題としての〈他者〉」と「対話者としての〈他者〉」(下 32)である。

例えば、私が初対面の誰かに向って「こんにちは、〇〇先生ですね」と呼びかけるとしよう。

この時、相手はすでに二重の相をもって私の前に現れている。その人は「〇〇先生」ということばによって特定され、主題化され、対象化される者であり、同時に「こんにちは」ということばを投げかけられる相手でもある。「主題として語られた他者」と、「語りの宛て先としての他者」。「対話」とは、この二種類の他者が重複し、かつ同時に現れる場面として理解することができる。

この対話的状況の中であって、私は、目前の人を「主題化」し、「一人の他者」として私の語りの中に包摂することができる。私は「あなた」を何らかのカテゴリーによって分類し、それに応じた行動を取ったり、逆に「あなた」に向かってある行動を指示したりすることができる。例えば、「あなたは先生なので、これをきちんと説明してください」というように。そのような主題化の可能性は、直接には観察できない他者の内面にまでおよぶ。「あなたは、こう考えているのですね。それでこういうことをなさったのですね。あなたのお考えはよくわかりました」と言うことができるし、その理解の正しさを問い質すこともできる。

しかし、その問いを差し向けている「相手としての他者」は、決して私の語りには包摂されない。それは「顔」として私の前に現前してしまう<他者>のままである。だから、私が相手のことをどれほどよく知っているとしても、「主題としての他者」と「対話者としての他者」の間には、常に解消できない「隔たり」(下 32)が広がっている。

私は「あなた」を対象化して語ることができる。しかし、「あなた」は「顔」として私の前に現れている者であり、常に私の語りの「外」に立っている者でもある。だから、<他者>はいつも「かたどられた世界」を超えて「あふれ出していく」。『全体性と無限』の訳者である熊野純彦は、訳書の解説の中で次のように言う。

他者を「理解」することも、もちろんありうることだろう。とはいえ他者はその理解を踏み越え、他者との「関係は理解をあふれ出して」ゆくのではないだろうか。他者を理解するとは、かえって、他者が私の知のいっさいから逃れ出る存在であることを理解することである。(下 330)

もちろんその事情は、「あなた」から見た「私」についても同様である。したがって、「対話者たちは世界を伝達し、あるいは<他者>による正当化をもとめることで概念を構成するのであるけれども、対話者たちはその概念に還元されることはない」(下 160)。

そして、執拗に繰り返せば、このような<他者>との「出遭い」があればこそ、人はことばを発しなければならない。他者の「顔」が語りを要請するのだ。

ことばを語ることは、(…)絶対的な差異からはじまる。(下 30)

顔は私にことばを語りかけ、そのことで私はある関係へといざなわれる。(下 38)

しかし、レヴィナスのこうした認識に寄り添うということは、単純に「他者」を二つの位相に振り分け、一方を「語りうるもの」に、他方を「語りえぬもの」に帰属させればよいという話ではない。彼の見方は、語りというふるまいそのものの了解において、根源的な態度の変更を要求している——少なくとも、次のような言明をそのことば通りに受け止めようとするのであれば。

顔はことばを語る。顔が現前することはすでにして語りである。(上116)

ここで、レヴィナスは、「ことば」そのものを、「他性」、「外部性」のあらわれとして定位しているようである。一面において、「ことば」は「世界を主題化し、伝達可能なものにし、普遍的なものへと構成する媒体」である。けれども、他方においては常に、「与えられた意味世界(=意味付与)を超え出て、あふれ出していく作用(=意味作用)」としてとらえられており、その「意味作用」の始原は、〈他者〉が絶えず「他」なるものとして現れ出ようとすることに求められる。

〈同〉に適合的な形態を解体して、〈他〉として現前するこのしかたが、意味すること、あるいは意味をもつことである。意味しながら現前することこそが、ことばを語るということだ。(上116)

先に見たように、レヴィナスは一面において、「語り」を「所有」の試み、すなわち世界を了解可能な意味秩序に包摂しようとする企てとして位置づけていた。しかしここには、ことばを発するということについて、根本的に異質な考え方が浮かび上がってくる。

記号的な分節化によって、ある対象を指示し、これを他者に伝えていくという働き以前に、ことばは、既存の「同一性をもった意味世界」を解体し、解体しつつ姿を現すことそのものとしてある。語りとは、まずこのような〈他者〉の現前に他ならない。この言い方をそのまま受け入れるとすれば、語りという出来事それ自体が、構築の外で生じていることになるだろう。

哲学史の中では、レヴィナスのこのような主張は、フッサール批判、ハイデgger批判の文脈において受け止められるものだという。これを、関根沙織は次のように説明する。

意味が自己から由来することにレヴィナスは異議を唱える。あるいは、意味が自他を越えたところにある体系への準拠によって生じるということにレヴィナスは異議を唱える。前者は他者が自己の意味として同に還元されることであるからであり、後者は他者と自己が両者に共通のある全体から説明されることによって他者と自己の相違・断絶が二次的なものとなるからである。自己から由来する意味が意味付与となり、自他を越えたある体系か

ら由来する意味がコンテキストとしての意味となってしまうのである故に、これに対抗してレヴィナスは「私の意味に先行する意味」、「コンテキストなき意味」といったものを考えざるをえなくなる。自己からも体系からも由来しない意味は、他者と呼ばれる。このような他者は意味の起点として考えられる。(関根 2007 : 43)

しかし、「私による意味付与」や「体系的な意味付与」に先行するような「意味作用」としての<他者>とはどういうものか。これを正確に把握することは容易ではない。しかし、少なくとも確かなことは、ことばというものが、<他者>の顕現そのものとして位置づけられていること、その<他者>の現れが、記号的な意味付与（言説的構築）に先行して起こっている、ということである。では私たちは、ここで言われている「ことば」なるものをどのようなものとして把握することができるのだろうか。

熊野純彦は、『差異と隔たり』の中で、レヴィナスの議論を展開しつつ、次のような問いを發している。

とりあえず、経験に与えられるがままの言語にそくするならば、ことばは記号ではない。むしろたとえばガダマーがそう語っているように、ひとが経験しているがままのことばが、そのものとしてつねに・すでに意味である。そのいみでは、言語を記号としてとらえる立場は、言語経験の基底的な次元をあらかじめ跳びこえてしまっている。<ことば>とは、ここではさしあたり、なにほどこか抽象化された体系ではなく、そのつどの言語活動そのものである、人の具体的な経験をさすこととすると、<意味>は<ことば>のうちにある。他者から発せられるのは、単なる音列であるのではなく、他者が語ることばそのものが、すでに意味である。一見きわめてトリヴィアルにもひびくことがらであるけれども、人がそれを生き、経験しているがままのことばに定位してかんがえるかぎり、「言語は記号である」という語りかたが、言語経験の基礎的なかたちを覆いかくすものであることを、まず確認しておかなければならない。(熊野 2003 : 152)

「人が経験しているがまま」に寄り添えば、「ことば」は、記号的な作用をおよぼす以前に、別の何かなのではないか。したがって、「言語は記号である」という定位は、言語活動の基礎となる経験を覆い隠しているのではないか。この問いは、ことばを変えて、さらに次のように反復される。

ことばの獲得とはひとつの世界の領有である。(…) ことばを手にするとは — あるいはことばの手に落ちることは — 、世界を所有すること、もしくはくじぶんのもの>としてこの世界に住まい、住みなれていくことである。世界はことばによって所有される。名ざすとは、語によって<もの>を手にし、<もの>の輪郭をさだめ、<もの>と世界とを



獲得することである。

そうだろうか。ことがらは、それで尽きているのだろうか。ことばを手にすること、手にされたことばを発し語りをはじめるとは、世界にたいしてただちに〈所有〉というしかたでふるまいをはじめることなのだろうか。言語とは、世界を領有するたんなるひとつのかたちなのだろうか。(同：195-196)

ことばによって分節化し、それを用いて表現することで、世界は自分にとって住み慣れた世界になっていく。その「構築的」な機能は否定し難い。しかし、ことがらはそれに尽きているのか、と彼は問うている。では、その「尽きせぬ部分」とは何か。ことばのうちで意味付与に先んじて生じていることとは何か。

おそらくはそれを(少なくともそのひとつの位相を)〈呼びかけ〉あるいは〈応答〉としてのことばと呼ぶことができる。

〈呼びかけ〉とは〈他者〉の現れそれ自体だと言える。

つまり、「あなたのことばに包摂できないなにかがここにいますよというしるし」(それはもちろん、謎や暗示や予兆のようなものとしてしか現れないものだけれど)が「ことば」である。そして、その「ことば」に答えるということは、そこで語られたことを越えて、そこに私のことばには包摂できない誰かがいるのだということを承認しようとする身ぶりである。

熊野は、レヴィナスの議論を敷衍しながら、ことばを語るということは、他者への贈与であると論じている。

ことばによって名ざすことは、一般に、他者とのかかわりを前提とするふるまいである。世界を語りだすとは、〈他者〉にたいして世界を語ることであるからであり、「〈もの〉を指示するとき、私はそれを他者にたいして指示する」(レヴィナス)ことになるからである。

(同：198)

ことばによって名ざすことで、私は他者にたいして〈もの〉を差し出すことになる。指示することが〈贈与〉となる。ことばは、それが他者にたいして語られるとき、世界の(所有というよりも、むしろ)私からの贈与に近いものとなる。他者にたいする〈もの〉の提供を含むことになるというよい。(同：199)

ただし、ここにいう〈他者〉、「ことばが差しむけられる〈他者〉」とは、「ことばによって一般化されることのない〈他者〉」である。「ことばを逃れ、その意味ではことばとしての世界から逃れる他者にむけて、ことばは語られる」(熊野 2003：200)のである。

確認されているのは、「この私が他者に向けて語る」(同：202)という単純な出来事がある、

ということである。〈顔〉として現れる他者への応答の身ぶりが語りなのである。

だから、そこにはいつも「賭け」がある、と言ってもいい。私はことばによって、世界を他者に贈り届けようとしている。そしてそれは、その他者が、この私の言語では包摂できないものであればこそなされる。そこに企てられる「飛躍」が語りなのである、と。

ここまで、レヴィナスの『全体性と無限』というテキストに即して、語りというふるまいの基底にある経験について考えてきた。私たちはひとまず、次のように言うことができるだろう。

ことばを〈呼びかけ〉や〈応答〉としてとらえた時点で、そこには、語り（構築された言説的意味空間）の中には包摂できない〈他者〉が現れている。その〈他者〉は構築の効果として言説の内部に回収されるのでも、語りえぬものとしてその外部に放逐されるのでもない。〈他者〉は語りを呼び起こし、同時にその意味世界の外へとあふれ出す。そのような〈他者〉への関わりが、すなわち語りに他ならない。

### 3. 「ただ聴く」というふるまいによって

こうした哲学者のことばを一方に置いて考えてみたいことがいくつかある。そのひとつは、近年「語りの場」とりわけ「臨床の場」においてささやかれる、「聴くこと」の力、それも「ただ聴くこと」の大切さについてである。

例えば、中村美佐(2004)は、多発性硬化症を患うある男性の語りを聴く、という実践を通じて、『聴く私は何者か』、『私は何をしているのか』という問いを留保し、語り―聴く場（…）に身を委ねること、「[語り手の]揺れに寄り添い」、その「語りにただ耳を傾ける」という姿勢こそが大切なのだという地点にたどり着く。語られたことを「評価」するのでも、「解釈」するのでさえもなく、ただ聴き、それをまた語る。ただそれだけの継続の中に、「語り―聴く」という「繊細な場」が現象化するのだと、彼女は言う。

あるいは、この論文を受けて、コメントを寄せた山口美和は、看護師の視点から次のように言う。

患者が看護師に向かって何ごとか訴える。看護師としての私に呼びかけられたのであれば、私は看護のコードに従って患者の訴えの「意味」を解釈し、適切なケアを選択・提供するであろう。だが、患者が「この私」を名指して語りかけてきたときには、看護のコードは役に立たない。患者は何かのケアを求めて語るのではなく、まさに語るために語っているからである。このような語りに「解釈―提供」という枠の中で応えることは、「この私」へと向かう患者の語りを遮断し、看護師としての能動性を手放さずに患者に相対することになる。患者に呼びかけられて語りに引き込まれた私が、まともに応答しようとするなら、能動性から引き剥がされた徹底的な受動性のうちに身を置かねばならない。(山口 2004 : 171)

臨床の場において、他者の語りに向き合おうとする人たちが示す、「解釈」も「理解」も「評価」もない、単純なく呼びかけ>と<応答>の水準に身を置こうとするこうしたふるまいは、何を意味しているのだろうか。

それは、対話の中に生じてしまう「<他者>を主題化しようとする態度」を極力きりつめ、「語り手」と「聴き手」がたがいに「相手」としてのみ向き合うような場を作り出そうとする試みに見える。「語り」を、意味秩序の構築には尽きない、「出遣い」(鷺田清一)としてとらえようとする。そうすることによってはじめて可能になるような、<他者>との交通の様相がある。そのことが強く認識されているのではないだろうか。

ここで、私たちは再び、「聴く」ということばで指し示される出来事の中に、二つの異なる位相があることを確認しておかなければならない。

ひとつは、語られたことを解釈し、これを私の意味世界のうちに所有すること。「私」が「他者」を「理解する」ということ。レヴィナスのことばを用いれば、「同 (le même)」のうちに「他 (l'autre)」を取り込むこと。

もうひとつは、「私」が、私にとって了解可能な世界の外へと連れ出されたまま、<他者>へと向っていくこと。「同」を超え出て、「他なるもの」を迎え入れることである。

ここで、あえてことばの意味を矮小化して、前者を<構築>と呼ぼう。それに対して、後者を<応答>と呼ぶことができるだろう。こうしたことば遣いに従えば、中村や山口の強調する傾聴の技法とは、「聴く」ことの内にある<構築>的な作業をあえて中断することで、<応答>の一面だけを押し出そうとする試みであると言える。そのようにすることによってのみ「生成する」語りがあることを、彼女たちは感じとっているのである。

おそらく、日常の対話の中には、常に二つの側面が生じている。しかし、ことばのやり取りを、「伝達」や「解釈」や「理解」の様相に限ってとらえてしまうと、対話の中で「私」が「他者」に向って連れ出されていくという一面が見えにくくなる。けれども、臨床的な語りにおいてしばしば、この<応答>の身振りだけを打ち出していくことが必要になる。「語りの関係」は、他の主体への伝達や理解によってではなく、そこに語る者がいるということの<迎え入れ>によって可能となるからである。「傾聴」ということばに集約されたこの態度は、日常的な対話のあり方から見れば、確かに特異なものに違いない。しかし少なくとも、語りとは常に<構築>と<応答>の相補的な循環の中に、あるいは相互のせめぎあいの中に生じているはずである。

#### 4. 「語り」と「倫理」のあいだ

同様の問題を、アーサー・W・フランクの著作に即して考えてみる。

『傷ついた物語の語り手』(1995年)においてフランクは、重篤な疾患や障害を負った人々が自己の経験を語る物語の湧出に、ひとつの時代のしるしを見ている。近代社会においては、

病いの現実を語る際に医療者の言語に特権的な地位が認められ、病む人々は自分自身の身体経験を「医学用語で語ること」に同意せざるをえなかった。フランクはこれを「語りの譲り渡し (narrative surrender)」と呼び、病いをめぐる近代的な言語的布置の特徴として位置づける。しかし、今や人々は、疾患や障害によって失われた「人生の海図や目的地」を取り戻すために、自己の経験を「自分自身のものとして認知することのできるような声」によって語り出そうとしている。病む人々は、「医学的物語によって語りうる以上のものが自らの経験に含まれている」(Frank1995=2002: 24) と感じ、「自分自身の苦しみがその個人的な個別性の中で認識されること」(ibid.: 29) を求める。このように、他者のことばにゆだねられていた経験を人々が「再請求 (reclaiming)」する状況を指して、フランクは「脱近代」ということばを用いる。「脱近代とは、自分自身の物語を語る能力が要求される時代」(ibid.: 25) なのである。

さてこの時、人々が「自分自身の声」による「自己の物語」を必要とするのは、病いによって混乱・断絶してしまった生活史の連続性を再構築したり、認知的な図式を修復したりするためだけではない。フランクによれば、「病む人々による物語の語り」は「他者のために生きるひとつの生き方」を表している。「物語は、他者の生に働きかけることによって、自らの生を変えていこうとする試み」であり、その一面において「証言の要素を備えている」(ibid.: 37)。脱近代社会において重篤な病いを経験する者たちは、その語りを通じて、「証言者」の位置に立つのである。

こうした認識の上にフランクは、「病いの語り手」を、その他の災厄の経験の語り手、例えばホロコーストの生存者たちのそれへと引き寄せていく。そして、その「苦しみを「語ること」、「聴くこと」のうちに、新しい時代の倫理の雛型を見いだしていく。では、この「証言の場」において「語ること」や「聴くこと」とはどのようなふるまいとしてあるのだろうか。

「証言」を受け取るということは、あるメッセージを受容するというのではなく、認知的な秩序の中には吸収しきれない現実へと呼び込まれることであるとフランクは言う。なぜなら、「証言」されている現実のうちには、「圧倒されてしまった」身体の経験が見いだされねばならないからである。その経験は確かに語られている。しかしその語りは、「理解の中にも想起の中にも定着することのない」「記憶の破片と断片」によって構成される。したがって病いの語りの根幹には、物語的秩序の中に整除しきれない「混沌」の層が横たわっている。「証言する」とは「それが証言するものの中に他者を巻き込む」(ibid.: 199) 行為であり、それを聴く者には「他者の混沌に敬意を払うこと」が求められる。そして、このような証言行為の相互性が実現されるためには、複数の身体間が必要になる。フランクのことばを借りれば、その語りを受け取るための方法は「ただ、共にあること」である。証言に対する「唯一ふさわしい反応」は「あなたは何を言いたいのか」と問うのではなく、むしろ「あなたと一緒にいさせてください」と頼むことなのである。

病いの物語の内容、そこに語られる出来事や行為や反応は、それらの物語が示す根底的な

証言への導入部に過ぎない。より根底にある証言とは、身体を持った語り手がそこにいるということなのである。病いの物語は、互いに向き合っている者同士の相互作用を必要とする。語り手の苦しんでいる身体そのものが証言であり、その証言を受け取るためには、聴き手が潜在的にせよ苦しむことのできる身体としてそこにいなければならない。(ibid. : 200)

ここでフランクが要求しているのは、単に証言の意味作用を口頭言語から身体言語の水準に移動させて考えよということではない。それは、語りという関係において、その内容 (= 語られたこと) には還元できない他者が、身体をもって現れてしまうということであり、その現れにつき添い続けることこそが証言の場に立つということなのである。それゆえに彼は、「病いの語り」を臨床的な (治療的な) 目的に従属させることに抵抗し、コミュニケーションスキルの問題に解消することにも反対する。物語を「聴き取る」ということは、「言語の意味」を理解することではなく、その意味内容に還元できない他者の現れに直面し続けることなのであるから。

その上でフランクは、いささか不器用に、「他者」の苦しみは、「私」にとっては常に「半ば開かれたもの」であるという言い方をする。そこには明らかに、レヴィナスの声が反響している。「他者」は「私」に語りかける。その苦しみの経験を、ことばによって主題化し、言説化し、私に伝えようとする。しかし、それは記号としてのことばによっては包摂しきれない。けれども、その「ことばへの包摂に抵抗するもの」は、単純に「ことばへの否定性」なのではない。むしろ、言語記号によっては把握しきれない形で現れてくるものが、「意味の始原」である。そういうものとして、私たちは語りを受け止めることができる。

## 5. 「語りの関係」とその条件

言説的な意味作用の前提に (あるいはその中心に)、「意味秩序」のうちには包摂されえない「二者の出会い」を見いだすこと。このささやかな確認は、社会的な認識の場にどれほどのものをもたらさうのだろうか。もしかするとそれは、分析的に限定された方法論上の視角 — 例えば「構築主義」のそれ — を、何ひとつ揺るがすことができないかもしれない。しかし、語りというふるまいを可能にする基底的条件をどのように認識するのかによって、語りという行為の認識のされ方や、語られたことばの解釈のされ方はやはり変わっていくことになるのではないだろうか。

例えば、「物語が語り直される」という場面がある。それは (とりわけ臨床の場を観察する) 構築主義的な物語研究の中でクローズアップされ、繰り返し記述されてきた現実である。同一の主体による「同一の経験」であったとしても、それをいかなるプロットにそって、いかなるコードに従って物語るのかによって、経験はまったく異なる様相をもって現れてくる。そして、その語り直しが、時には大きな「治療的」な効果をもたらすものであることを、私たちは「ナラティブ・セラピー」の実践報告から学んできた。

しかし、いついかなる時にも、人は自己の物語を語り直しうるわけではない。固着したプロットラインから抜け出せないこともあれば、経験をことばにしようとしても点的な現実を「ぶつぶつとつないでいく」ことしかできない（有効な筋立てをえられない）こともある（フランクはそれを「混沌の語り」と呼んでいた）。ここで、人が物語を語りうるか否か、その場に物語が生成しうるか否かを左右する条件を、私たちは思考することができるだろうか。もちろん、それは科学的に問うことのできない、現実の「偶発的」な領域に属すると見なすことも可能である。しかし、そのような態度は少なくとも私たちの日常的な直観からかけ離れている。「私」が、自己の経験を語りうる場、それを語り直すことのできる場と、なかなかそれができない場とでは、やはり質的な差異があるように思える。

その条件を思考するルートは、おそらく二つの水準に開かれている。ひとつは知識社会学的に「言説行為」の「文脈」を明らかにしていくこと。もうひとつは、「語りの生成」の基底にある「語りには包摂できない出会い」を、別様の言語によって思考していくことである。ごく素朴に考えてみても、対話の「相手」が「私」を<他者>として<迎え入れる>姿勢で相対してくれなければ、「私」は「語る」ことができない。少なくとも、そうした他者の身構えの有無が「私」の語りを大きく変えていく。この認識を基本仮説として、「語られたもの」の内容や「語りという行為」の現れ方から遡及する形で、「語りの関係」や「語りという経験」の質をとらえていくことができるのではないか。私はそんな風に考えている。

## 【文献】

- Frank, A. W., 1995, *The Wounded Storyteller, Body, Illness and Ethics*, University of Chicago Press.
- （鈴木智之訳『傷ついた物語の語り手』、ゆみる出版、2002年）
- 橋本典子、2007、『存在を超えて—レヴィナス試論—』、哲学美学比較研究国際センター
- 小泉義之、2003、『レヴィナス 何のために生きるのか』、NHK出版
- 熊野純彦、2003、『差異と隔たり 他なるものへの倫理』、岩波書店
- Lévinas, E., 1961, *Totalité et infini, essai sur l'extériorité*. （熊野純彦訳『全体性と無限（上・下）』、岩波文庫、2005年、レヴィナスからの引用は全てこの岩波文庫版による）
- 中村美佐・岡部美香・加藤匡宏、2004、「多発性硬化症に罹患したA氏の病いの体験の語り」、臨床教育人間学会（編）『他者に臨む知』、世織書房
- 佐藤義之、2004、『物語とレヴィナスの「顔」』、晃洋書房
- 関根小織、2007、『レヴィナスと現れないものの現象学—フッサール・ハイデガー・デリダと共に反して』、晃洋書房
- 鈴木智之、2006a、「他者の動機を語るということ」、『三田社会学』11号
- 、2006b、「臨床的なものと物語的なもの—ナラティブ・セラピーと NBM についての覚書—」、『Trace2005』、法政大学鈴木智之ゼミナール研究報告書

土屋由美, 2007, 『生によりそう「対話」 医療・介護現場のエスノグラフィーから』, 新曜社

内田 樹, 2004, 『他者と死者 ラカンによるレヴィナス』, 海鳥社

鷺田清一, 1999, 『「聴く」ことのかー臨床哲学試論』, 阪急コミュニケーションズ

———, 2007, 『思考のエシックス 反・方法主義論』, ナカニシヤ出版

山口美和, 2004, 「〈他者〉の「語り」を聴くということ」, 臨床教育人間学会 (編) 『他者に臨む知』, 世織書房

(すずき ともゆき 法政大学社会学部)